

日本SOD研究会報

「神は自然の恵みのうちに
全ての良薬を与え給う」

丹羽耕三

丹羽先生 喜寿の祝賀会

素敵なおカードも配られました

発行元 日本SOD研究会 藤沢
住所 〒154-0012
東京都世田谷区
駒沢 5-13-1-205
TEL. 03-5787-3498
<http://www.sod-jpn.org/>

去る11月7日、東京は文京区にある椿山荘にて丹羽先生、77歳を祝う喜寿の祝賀会が盛大に開催されました。各界から200名にも及ぶ方々が集い、丹羽先生の誕生日を祝いました。今回はそのなかで丹羽先生に送られたスピーチや先生のお話を紹介します。

先生に命を救われた患者さん始め、列席のみなさんが、丹羽先生の昼夜問わずの診察や研究、先生の人柄に大きな敬意を表しているのが伝わってくる、とても温かい集いでした。

先生が切り開いた

統合医療の道

この日、駆けつけた来賓の方々、みなさん、丹羽先生のシンパであり応援団のような方々。もちろん、西洋治療の医師の方々もたくさんいらしていました。そのなかのおひとり、郡山で女性のためのクリニックとして、また免疫療法を推進されている病院として有名なロマンダクリニックの富永院長のお話を紹介します。

「14、5年前に土佐清水病院にお伺

いし、先生の臨床を勉強させていただき、以来、先生の弟子のひとりだと自負しております。講演にお招きしたとき、先生が一時間余り遅れていらしたことがあります。後で聞きましたら、最後の患者さんの質問に答えていたら遅くなってしまったと。そのとき、先生は最後のひとりの患者さんまできちんとケアしていらつしやるんだと感銘を受けました。あと、医者立場からひとつ。先生は、日本における統合医療の草分け、西洋医学には限界がある、いや、むしろ西洋医学には問題がありすぎるんだということを初めて日本の社会に向けて発した方だと思います。先駆者です。今、いろんなサプリメントや健康補助食品や民間療法が巷にあふれています。先生は絶えず学問を基盤にしてきちつと研究された上で統合医療の流れを推進してこられた方だと思います。そのためにはたくさんのご苦労があったことを承知しております。薬草や植物を使った治療というのは論文を出しても意地悪い委員がいっぱいいて妨害される人が多いんです。そういう



丹羽先生の艶姿!!

圧力を跳ね返して先生はがんばってこられた。その根底にあるのはかつて大事なご息を亡くしたときの西洋医学に対する悔しさが流れていたのではないかと思います。

この30年くらいで病気のなりたちというものが大きく変わってきました。そのことを先生はいち早くキャッチされ、統合医療の道を切り開いてくださったことは、我々医者としてとても感謝しております

医師のお立場ならではのお話でした。

先生は患者の希望の光 肺がんの患者さんの声

祝賀の会にはこのような医学関係者の方だけでなく、先生に命を救われた患者さんもお祝いに駆けつけていました。そのなかでお二人の方がスピーチをされました。ひとりには北陸からわざわざいらした77歳の男性の方。もうひとりには30代の女性の方でした。どちらのお話も感動的で、来賓のなかには涙ぐむ姿も数多く見られました。今回は3年前に肺がんの宣告を受けたという男性の方のお話を抜粋してご紹介します。

「3年前、どうも調子が悪いなという事で地元の総合病院で精密検査を受けましたら、やはり、悪性腫瘍がある、肺がんだと診断されました。私は重度の肺気腫があり、

外科的な治療は難しいので、放射線治療をやりましょうという話でした。そのときに、肺の腫瘍の一部を内視鏡で取り取って検査をするのに、がん細胞が飛び散ることもあるけれど、大丈夫だからやりましょうと言われたのです。それで私は、その検査は100%大丈夫なんですか？と聞きましたら、やってみないと分からないと。そのとき私は、人生そこそこ生きて来た。これ以上しゃばにしがみついて生きていてもそんなにいいことはないと思ったんです。これは私の寿命だと。それで西洋治療をお断りしました。最後にドクターに、私はあとどれくらい生きられますか？と聞きましたら、非常に厳しい質問ですね。あと、1年くらいは大丈夫ですと。まだ元気な今のうちに旅行をして、好きなように生きてくださいと。気が変わったらいつでもいらっしゃいといわれました。その話を周囲のものにしましたら、みんな病氣と闘うべきだ、どんな治療でも受けるべきだというのです。というのも、私の家系は私以外、医者だらけなんです。それぞれの医者がいろん

なことをアドバイスしてくれるなか、ある医者が、それだけ西洋治療がいやなら、免疫療法をやっていると教えてくれたのです。それからネットや書物で丹羽先生のこと、免疫療法のことを調べまして、納得して小松の診療所で診ていただきました。あれから3年。土佐清水病院に2度お世話になりました。あそこはとにかく空気がきれいで、広々とした太平洋を眺める素晴らしい環境の中で治療と療養ができたことがなによりも感謝している次第です。その後は毎日ウォーキングを楽しんでいる毎日です。

先生は私たちにとって希望の光であり、大きな心の支えであり、大恩人であります。どうかお体をご自愛され、そして全国の患者さんたちの救済にあたっていただきますようお願いいたします」

77歳という男性の方は、お年を感じさせない若々しいたずまいで、しっかりと素晴らしいお話を聞かせてくれました。

そして続く女性の方のお話ですが、あまりにも感動的だったので、これは改めて一対一でゆっくりと

お話をしていただければと思います、その場で取材のお願いをしました。ですから次号で改めてご紹介したいと思います。

歌まで初披露

11年後、米寿の会で

再会を約束

さて、会のほうはなごやかに進み、数々の祝電も紹介されました。そんななか横綱、白鳳関の祝電が紹介されると、場内は大きな拍手に包まれました。また、先生の幼少時代から医師になるまでの写真もスライドで紹介され、ほほえましい一時でした。タレントせんだ

みつおさんのトークや歌手、北原ミレイさんの歌声も会に華やかさを添えてくれました。

そして最後は丹羽先生の謝辞のスピーチ。

満場の来賓が今か今かとステージ上を見つめていると、そこに登場した丹羽先生の姿に会場は大爆笑。なんと、そこには江戸時代の殿中袴姿の先生がいらっしやったのです。水色の直垂に黒の烏帽子をのせたスタイル。イメージとしては赤穂浪士の映画に良く出てくる浅野内匠頭といったところ。確か、会の始まりは燕尾服だったはず。しゃれの効いた丹羽先生らしいジョークでした。



各界著名人からたくさんのメッセージ

「今日はみなさんお休みのところ全国津々浦々から私の喜寿のお祝いに駆けつけてくださって心からお礼申し上げます。77歳、医者になって52年。いろいろやってまいりましたけど、とくに子供が亡くなって27年。抗がん剤を使わない丹羽療法を始めまして、いろいろなバッシングも受けましたが、ここまでなんとかかやってこれましたのは、ひとえにここにお集まりのみなさんの支えがあったおかげです。決して私一人でここまで来たわけではございません。この場を借りてお礼を申し上げます。

この歳になって私が高齢で野球を始めたいといいますが、10年くらい前から同級生がバタバタと倒れていきまして、私自身も心筋梗塞になりました。このままでは私もダメだと。で、老化、がん化を防ぐにはとにかく適度に身体を動かして汗を流して頭を使うことであると。それでアルツハイマーにならないためには、動体反応だと。それにはゴルフのように動かない球を打つのではなく、100キロ以上のスピードの球を打つ野球だと。それでやり始めたんです。先

日は僕のいちばん親しかった高校時代の友人が亡くなり、京大の先輩の教授も先日連絡したらがんで入院されていると聞き、周囲がどんどん寂しくなっています。ま、よく考えてみると77歳になってこれだけ元気にしているほうがめずらしいわけです。私はとにかく、人のやらないことをやるのが好きで、あと10年、20年、30年、元気で診療、研究、野球をやりたいと思います。

今年には本当にいい年で、私が二十何年やってきて、末期のがん患者さんがたくさん元気になられたのに、エビデンスがないから信用できないといわれ悔しい思いを何度もしました。今回、世界的に認められている一流の国際医学雑誌に私の丹羽療法が載ることにな

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
☎0120(731)175
もしくは

日本SOD研究会
☎03(5787)3498
まで お電話ください。

りました。この5年間、1500人に及ぶがん患者さんのデータをもとにした療法が年末に載ることになりました。代替医療、漢方的な医療では世界で初めて私の論文が載ることになりました(会場から大きな拍手が)。それと私の息子の闘病を書いた本『白血病の息子が教えてくれたこと』が文庫になります。この本を読まれた出版社の社長さんが、涙なしには読めないくらい感動したとおっしゃって、文庫本として再出版されることになりました。

あと、僕の野球チームがとうとう全国大会に出ることになりました。いま、ベスト8に残り、東京ドームで決勝戦があります。私の草野球チームもいよいよここまできました。私は野球でもなんでも、人に負けるのが大嫌いですから、活性酸素の研究でも、SODでも、とにかく日本一、世界一になってやるんだと。野球まで日本一になれるところまできました。

今日はみなさんありがとうございました。次は、11年先に米寿の会をやりますので、みなさんも11年先にお元気でここに出席して

ただけるようお願いします。丹羽療法を守って、SODを飲んで、11年後再びここでお会いできることを楽しみにしておりますのでよろしく願います」

笑顔と満場の拍手のなか、最後は丹羽先生の歌まで飛び出しました。歌うは赤穂浪士の歌「俵屋玄蕃」。なるほど、これがあつてのこの衣装ということが判明。さらにアンコールで「奥飛騨慕情」まで歌われ、会場も大喜び。先生もこんなにリラックスして楽しそうにされるのだということを知りました。

帰りには会場の出口で一人ひとりの来賓の方とお話をされ、写真を撮り、抽選でおみやげまであった喜寿の会。先生の功績、お人柄が会場の隅々にまで行き渡るかのような温かいバースデーパーティでした。



SOD愛飲者インタビュー

SODと丹羽療法で 末期の肺がんから生還

神奈川県 多賀名敦子さん(68歳) 千葉県 廣野泰子さん(66歳)

今回お話をうかがったのは、神奈川県にお住まいの多賀名敦子さんと千葉県にお住まいの廣野泰子さんです。おふたりは姉妹で、取材に到ったキツカケはお姉様の多賀名さんが編集部に送って下さったお葉書でした。

「私の妹が末期の肺がんで土佐清水病院に入院しました。2ヶ月後、妹から電話があり、すっかりがんが良くなったので間もなく退院すると言ってきました。丹羽先生とSOD、すごいですね」

簡潔な文章でサラリと肺がんが治った旨が書かれていて、つい、肺がんというのは簡単に治るのかもしれないという錯覚さえしてしまいました。よくよく冷静に読み返し、これはひよつとしてとんでもない事なのではと思ひ、さっそく多賀名さんに電話をしたのです。「ええ、そうなんですよ。今、妹は、

土佐清水病院からこちらに車で帰ってくる途中なんです。遠いし長旅で疲れるといけないから、2日ばかりでゆっくりと帰還しています。ええ、まさに帰還なんです。おかしいでしょ？」

電話の向こうからとびきりの明るい笑い声が聞こえてきました。そして、落ち着いたら神奈川県のお姉さん、多賀名さんのお宅でおふたりにお話をうかがう約束をしていただいたのです。

10月下旬。その日は秋晴れの清々しい1日でした。奇跡の生還をされた妹さん、廣野泰子さんの気分もおそらくこの晴天のようだと思ふと、お会いするのにも心が躍りました。

お会いして、あまりのお元気な姿に驚かされました。退院されたばかりということから、病み上がりの様相はどこかにあると思つて



廣野さん (左) 多賀名さん (右)

いたのに、お顔の色つやはいいし、きびきびと動かれるその姿は、とても数ヶ月前まで末期のがん患者さんだったとは思えませんでした。「ほんとうにありがたいですね。これでも姉には仕事のしすぎで疲れ顔していると言われるんですよ(笑)」

早くもお仕事に復帰されているとは驚きです。そんな廣野さんの闘病生活は7年前に遡ります。今

の笑顔がうそのような壮絶ながんとの戦いに、思わず絶句でした。

5回の乳がん手術 そして肺への転移

——最初にがんが分かったのはいつごろだったんですか？

廣野「7年前、始めは乳がんでした。一家で飲食の仕事をしています。お店だけでなくお弁当の仕出しもしていますから、忙しかったですね。自分の体の事など気にかけている暇がなかった。ただ、同じ頃、糖尿病になり、インシュリンを自分で打っていたんです。そんなときに今度は胸にしこりがみつかった。検査をしたら乳がんと言われ、すぐに手術をしました。ところが、半年くらいしたら、またしこりがみつかった、また手術。結局、千葉のその病院で4回も手術したものですから、さすがに、こんな病院ではダメだと思いました」

——転院されたのですか？

廣野「はい。東京の有名な大学病院に。そこで、がんというのは、一部分だけを切ってもダメ。特に乳がんは大きく切らないといけない。

い。目に見えるがんの周辺にもいっぱい見えないがん細胞が散っているんだから、といわれて大きく切除したのが2年前でした。そのあと、放射線治療に入ったんですが、これがいけなかったですね。腕がまったく上げられなくなりました。しかも25回も照射したものですから、胸の皮膚は真っ黒に焼けただれ、2回くらい皮がむけましたね。そりゃあ痛くてつらかったです。こんな治療ダメだと思いますね。あとで丹羽先生から放射線は被曝したのと同じだと言われ、知らないってことは恐いって思いました」

——丹羽先生は、レントゲン、MRI、MRA、PETなどの造影検査も被曝したのと同じことだと言いますから、その何倍もの放射線を25回はひどいですね。

廣野「ですから、いろいろあって9ヶ月くらい病院に行かなかったんです。そうしたら、去年の11月頃から咳が出始めた。最初は風邪かなと思っていたんですが、一向に良くならない。むしろどんどんひどくなって、咳をするたびに失禁するくらいにひどくなったんで

す。トイレに行きつばなしで、夜も咳でろくに眠れない。からんだ痰の始末に一晚で2箱ものティッシュを使い切っていました」

——病院へは行かれたのですか？

廣野「あまりにもつらいので、今年の3月始めに行きました。そうしたら先生の菌切れが悪いんです。困ったような顔をして、ずいぶん薬を飲んでいなかったからなあ、なんてつぶやいているんです。そして呼吸器科に回されて検査をしたんです。それが大変で、カメラを喉から入れて、メスで組織を切るものだから、死んでも異議申し立てしませんという一筆まで書かされたんです。しかも先生が8人もずらりという、あれこれ検査、検査。これに疲れ果てました」

——まるでモルモットですね。

廣野「そうそう、まったくそんな感じでした。おまけに結果は肺がんが胸に2ヶ所もあり、乳房にも細かいがんがたくさん散っているって言われたんです。それで先生に、もう放射線とかはいやだったので、温熱療法はできないか聞いたんです。そうしたらダメだと。さらに手術も無理だというんです。

じゃ、どうすればいいんですか？と聞いたら、またうーん：と口ごもっちゃって。ですから私も、先生、もしかしたら末期なんですか？と聞いたんです。それにも返事がないんですよ。そのとき初めて、ああ、私は末期の肺がんなんだと自覚しました」

——日本の病院は本人にはがん告知はしても、末期だとか、余命、何ヶ月というようなことはほとんど言いませんよね。

廣野「そうなんです。でも、うすうす分かりますよね。だからものすごく落ち込みました。もう死ぬんだと思うと恐くて、それで姉に相談したら、とにかくSODとアガリクスとチャージャーを送るから、じゃんじゃん飲みなさいって言われて」

今生の別れに温泉旅行 咳で露天風呂に入れず もう死ぬんだなと：

——お姉さまの多賀名さんは、どうしてSODのことを？

多賀名「12年前に大学院で学んでいまして、そのときの教授からS

ODと丹羽先生の御本をいただいたことがあって、ずいぶん前に知ってはいたんです。私は美容関係を始めとする小さな会社を経営しておりまして、メーカーさんから、美容、健康に関するいろんな資料が送られてくるんです。その中にSODの資料があったんです。妹が乳がんにかかってからというものの、いつもそのことが気がかりでしたから、SODのパッケージや名前を見てふと教授のことを思い出し、資料を読んでみたんです。そうしたらがんにもよいということとが書かれていて、取り寄せてみたのが去年の12月中旬でした。まさに私が朝晩1包ずつ飲み始めました。すると、2ヶ月くらいで身体が軽くなり、オーバーに聞こえるかもしれないですが、身体の上の細胞が10年くらい若くなったように感じたんです。これは理にかなった本物だと確信しました。そんなときに妹から、乳がんが肺に転移してしまっただと蚊の鳴くような小さい声で電話があったんです。驚愕し、動転しましたが、すぐに丹羽メデイカル研究所に電話してがんに効くものをすべて取り

寄せました」

——取り寄せたものは？

多賀名「SODはもとより、アガリクス、チャージャー、フラノナフトキノン、マグニーです。妹に私の2ヶ月の体験と丹羽先生の話をして、全部プレゼントするからじゃんじゃん飲んでみてといいました。そして希望を持たせるために、旅行にも誘ったんです。でも、末期がんだということでしたから、正直、半ば覚悟していました」

廣野「あのときは周りの雰囲気もう残り少ないからと腫れ物に触れるような感じでした。子供たちも覚悟していたようです。それで、雪が好きな私のために、3月中旬に姉と娘たちが山形の温泉に旅行に連れて行ってくれたんです」

多賀名「今生の別れじゃないですが、元気なうちに楽しい思い出を作ってもらいたかったんです」

廣野「ありがたかったです。でもね、大好きな露天風呂に入れなかったんですよ。外でしょ？ 寒いでしょう？ 冷たい空気が入ると、猛烈な咳に襲われて息もできなくなるんです。ああ、もうダメなんだなって」

多賀名「このときの彼女は、見るからに重病人という感じでした。ああ、もう長くはないなって誰が見ても思っただけです。これを救えるのは丹羽先生しかいない、是非でも診ていただこうと思って新横浜の診療所を予約したんです。あいにく先生が新横浜にいらっしやるのが1ヶ月後で、それまでとにかくSODとアガリクスなどをたくさん飲ませていました」

廣野「その前に、糖尿病でかかっていた病院に行ったところ、ずいぶん数値が良くなっていると言われたんです。食事制限、がんばったんです。と褒められたけど、食事制限なんか何もしていません。ただ、SODなどを飲んでいただけだったんですよ。なのに、7年続けたインシュリンをもう打たなくてもいいとまで言われたんです。なんだか良く分からないままに姉に勧められてSODを飲んでいて、正直、あまり期待はしていませんでした。だから、大病院から処方された抗がん剤も並行して飲んでいました。でも、糖尿病の数値が下がったとき、初めてSODは本当にいいものなん

だと思いましたし、丹羽先生の治療ももしかしたらと思っただけです。そして、忘れもしない4月の20日でした。旅行から1ヵ月後。大病院からは入院しないといけないと言われていましたが、丹羽先生の診察が先決でした」

多賀名「丹羽先生の診察を受ける半月前から妹はうちに滞在していました。滞在するとわかってから、私は、妹のためにできるかぎりのことをしてあげたいと思っただけです。それで掃除をしても取れないほこりやダニ、菌が肺に入っているといけないと、全室のエアコンを新しいものに替え、空気清浄機と加湿器を設置しました。それとカーテンやお布団、枕、カバーなども買い揃え、大忙しでした。そして妹が来てからは、休みの日はいっしょに観劇やお食事を楽しみ、今までのことなどたくさん話をしました。診察日までの間、SODやアガリクスなどをたくさん飲んで、丹羽先生に診察していただけるのを心待ちにしていました」

廣野「でも、抗がん剤は半分だけ飲んでいたんです。でもそのことは姉に怒られると思って言わな

かったんです」

多賀名「ある日、妹の顔に湿疹ができていたんです。どうしたの？と聞きましたら、抗がん剤を飲むといつも湿疹が出るのと言うのです。だめじゃない！毒を飲んでるのよ！もうやめなさい。あと4、5日の辛抱でしょ」といいました」

丹羽先生は10年、20年

生きられるように

してやると

——そして丹羽先生の診察を受けられたんですね。いかがでしたか？

多賀名「大病院で撮ったレントゲンをご覧になった先生は首をかしげながら、どうかな、どうかなと独り言のようにおっしゃるんです。私たちの前の患者さんには、大丈夫、大丈夫、手術したら僕のところへ来なさいっておっしゃっていたのに」

廣野「なにかおかしいなと思っていたら、先生が私に、ええか、よく聞きなさいよ。乳がんから肺に転移したら普通の病院では間違いない余命半年じゃ、と言われたん

です。やっぱりそうかと思いましたが。初めて明確な答えを聞けたんです」

多賀名「そのとき私は思わず先生！妹は先生のお薬を1ヶ月前から飲んでいません。SOD10包と、アガリクス6包、フラノナフトキノン2杯、それにチャイガを煎じて飲んでます。レントゲンなどの資料は1ヶ月前のものです」と言ってしまったのです。そうした



ら、先生の表情が変わったんです。

それでか、よし、やってみようと言われ、ええか、1年、2年の延命をしてもしょうがないやろ？

多くのところで10年、20年生きれるようにしてあげるから」とおっしゃって下さったのです」

——そういわれていかがでした？

多賀名「先生の心強い言葉を伺って、助かる、生きられるんだと思うと、もう嬉しくて、嬉しくて、4人で顔を見合わせ、一転、満面の笑顔になりました。先生の助けてくださるというお話を聞くまでは、それはそれは重い空気の中におりましたから、帰り道は雲の上をふわふわ歩いているような軽やかな足取りで、感謝の気持ちいっぱいであ路につきました」

——それからすぐに土佐清水病院に入院されたんですね。

廣野「はい。大病院には、他の病院に行くのでもう抗がん剤治療はしませんと言ったら、同じ病気で他の病院にかかっても保険は出ませんよと言われましたが、結構ですといいました。怪訝な顔をされましたね。高知県の病院に入院すると、お医者さんを始め周りの人はみんなホスピスに行くんだと思っていましたね。帰りは骨になって帰ってくると思っていましたね」

——土佐清水病院の入院生活はいかがでした？

廣野「いいところでしたよ。生薬から作られた各種のお薬とSOD

を飲んで、あとはのんびり過ごすように言われました。入院して半月くらいでずいぶん良くなり、あとはもう快適でした(笑)。食事も薄味でおいしくて、空気もきれい。坂道なども平気で散歩できるようなって、のんびり自由に過ごしていました。患者さんの中にはカラオケに行かれたりして、とにかく自由なんです。病院という感じじゃなかったですね。あまりにも早く良くなるものですから、先生にもう退院してもいいんじゃないですか、と言ったら、何言ってるんだ、ちゃんと治さないとお姉さんが泣くぞ! って言われて、ほんとうに暖かい先生ですよ」

多賀名「私も、しばしば電話をしては様子を聞いていました。声だけでも元気になっているのが分かりました。7月中旬には2泊3日でお見舞いに土佐清水まで行きました。久しぶりに会う妹は、あまりにも元気そうで、病気のことなど忘れてしまいそうでした。そして髪をカットしてきたのですが、ほかの患者さんのカットもして、和気あいあいでした。行く前までは、重病の方が多く、大変なのだろうなと思っていたのですが、行ってみると、みなさんとてもお元気な方ばかりで、明るい病院という印象でした。きっと環境がいいのでしょうね。水、空気、そして医療のすべてが整って始めて病気を完治するのでしょうか。とても明るい気持ちで帰ってくるのができました。残念だったのは土佐清水の観光ができなかったことですね(笑)。次回は4人で観光で行きたいです。四万十川や足摺岬など素晴らしい景色をゆっくり眺め、新鮮なお魚を食べたりできたらいいなと思っております」

——そうですね、先生も土佐清水は日本でいちばん空気のきれいなところだとおっしゃっていますから。

多賀名「先生にはほんとうにお世話になりました。妹に命をくださいたいことを思うと感謝でいっぱいです」

——廣野さんは退院されてまだ1ヶ月くらいですよ。大病院のほうには行かれましたか?

廣野「行きました。担当の先生にお会いしたら、びっくりされました(笑)。レントゲンを撮ったんで

すが、それを見て、がんがどこかへ行ってしまった・・・とだけおっしゃって、呆然としてました。そして、いったいどんな治療をしたのか教えて欲しいとおっしゃるので話したら、ちゃんとノートにメモを取っていました」

——担当の先生に丹羽先生の本『がん治療 究極の選択』をさしあげるといいかもしれませんね。論理的にがんのことやSODのことが書かれていますから。

廣野「あれからいろんな方にSODのことや丹羽先生のことを教えてほしいって言われます。実際、SODを欲しいという方が多くて、あつという間に私の手元のSODがなくなっちゃうんですよ。本当にどんなに感謝してもきれいな

くらいです。丹羽先生始めスタッフのみなさんによるしくお伝えください」

●●●●●●●●●●

この2年間の間に地獄と天国を経験された廣野さん。「丹羽先生と出会うことがなかったら、もうここにはいなかった命。縁とはいえ、ありがたいことです」とおっしゃる隣でお姉さまの多賀名さんが嬉しそうに微笑む光景に思わず感動してしまいました。姉妹、家族の絆、命の重さ、尊さを改めて気づかされました。取材が終わると「これから退院のお祝い旅行で熱海に行くんですよ」とおふたりのきれいなお嬢さんも登場。今度こそ4人で大好きな露天風呂を満喫されたことと思えます。

**SOD様作用食品
体験者の声をお聞かせ下さい。**

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒154-0012 東京都 世田谷区 駒沢5-13-1-205
日本SOD研究会 藤沢宛
TEL 03-5787-3498
までご一報ください。

SOD様作用食品とは● 丹羽博士の開発

SODとは、スーパーオキシド・デイスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康の力を握る物質として「活性酸素」と「SOD」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや成人病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くSODという酵素が



存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のSODだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにSODという酵素は分子量が大きいため、内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽SOD様作用食品です。

開発した丹羽勲負（耕三）医学

博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにSODの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った、自然の摂理」は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治療力の偉大さを教えてくれました。病氣は自分が治すもの。私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、SODなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

丹羽療法を知る一冊

◆ブックガイド◆

「がん治療 究極の選択」

講談社

「丹羽SOD様作用食品摂取者の体験報告」日本SOD研究会

「丹羽博士の正しいアトピーの知識」廣済堂

「天然SOD製剤がガン治療に革命を起こす」廣済堂

「白血病の息子が教えてくれた 医者的心」草思社

「安心の医療・本当の健康」みき書房

「クスリで病氣は治らない」みき書房

「医は仁術なり」至知出版

「丹羽療法全国のアトピー患者が信頼するこれだけの理由」リヨン社

「SOD様作用食品の効果」小冊子

